



教皇様の聲

213 号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済 ©1998

神の愛と赦しには限りがない

元旦に当たり、全ての家庭、民族、善意の人々の上に平和と安寧を祈ります。それは私の心からの願いでもあります。何よりもまず、時が移り変わっても揺らぐことのない神の忠実な愛への信頼の上に成り立つ祈りです。そう、神は私たちを愛しておられる。限りなく愛しておられます。祝された処女を「神の御母」の名で賛えて祝う本日の典礼もまた、そのことを思い出させてくれます。マリアを「神の御母」と呼ぶことは、何を意味するのでしょうか？それはマリアの胎内の実りであるイエズスを、永遠に御父から生まれた御父と等しい（同質の）神の御子と認めることです。すばらしい秘義、愛の秘義です。御父の御独り子（ヨハネ 1・14）、私たちの一人となられた方です。こうして「永遠が時間の中に入り」（「紀元二千年の到来」9 番）ました。長い時の流れは、もはや盲目的な未知への旅ではなく御子への旅、時の完成（ガラツィア 4・4 参照）、歴史の目的地への旅です。

祝された処女を神の御母と賛える私たちは同時に、人となられた永遠のみことばイエズスを、まことの「マリアの御子」とであると強調したいと思います。マリアはイエズスに完全な人間性を与えました。母として、教師として彼に奉仕しました。優しく、心遣いにあふれる気質の力と豊かな感受性を植えつけました。賜物と賜物の驚くべき交換です。被造物である

マリアはキリストの弟子であり、キリストに贖われた者でしたが、同時にその母として、キリストの人間性を形成するべく選ばれた御方でした。このように降誕祭の深い意味は、マリアとイエズスの関係によって満たされています。神は私たちのような者となられ、私たちがある意味で神と似た者となることができるようにしてくださいました。

まさにこの愛の秘義のおかげで、私はためらうことなく新年最初の日・世界平和の日のメッセージを「赦し合い、平和を築く」という切実なテーマに捧げたいと思います。赦しは難しく、時には不可能とすら思えることは承知しておりますが、他に道はありません。復讐や暴力は全て、さらに一層の復讐と暴力を生むばかりです。神が決して倦むことなく私たちを愛し、赦してくださることに気づくなら、赦しは困難ではなくなります。神の赦しを必要としない人がいるのでしょうか。祝された処女、神の御母、新年を愛と、必要ならば和解の行為でスタートさせることができるよう、正義と平和の旗のもとにより良い世界を築く力となることができるよう、励ましてください。全ては過ぎ去り、心を満たせるのは神だけであることを私たちが忘れることありませんように。

(九七・一・一、お告げの祈りの時のお話、聖ペトロ広場にて。)

洗礼は神の愛のあらわれ (主の洗礼の祝日・幼児洗礼式で)

今、福音書の言葉を聞きました。「あなたは私が喜びとする私の愛する子である。」みことばを祝う本日の典礼が強調している御父の「声」は、イエズスの生涯におけるこの救いの出来事に隠された愛の秘義を黙想するよう招いています。それは同様に、間もなくこの子供たちを永遠に神の愛する子とする洗礼の秘跡をも、この同じ愛に含めて考えるようにという勧めでもあります。

ヨルダン川での洗礼の秘義において、私たちはイスラエルの救い主、神の子としてのイエズスの登場を祝

います。ルカの福音では、この出来事の意味をきわだたせ、明確にするような状況の中に位置づけられている場面です。ヨルダン川に集まった人々は心にいくつもの疑問を抱き、待ち望んでいました。人々は神への憧れを覚え、改心への呼びかけに応じたのです。そこにはヨハネがいました。人々の疑念を感じ取り、それらを真理に仕える機会として用いました。「ヨハネは皆に向かって言った。『私は水で洗礼を授けるが、私よりも力ある方が来られる。私はその方の履き物のひもを解く値打ちもない者だ。その方は聖霊と火であなたた

ちに洗礼を授けられる。』（ルカ 3・16）最後にルカはこの場の主役であり、罪人たちの間に隠れて祈っておられるイエズスを登場させます。彼こそは人々の期待への答、世の罪を取り除く汚れない子羊なのです。

こうしてイエズスの公生活は、新たな創造を預言するしるしと出来事の中に始まりました。アダムの罪のため閉ざされていた天国が開き、聖霊が「はどのような形をとって」イエズスの上に降り、御父の優しい御声が聞こえました。

その時からイエズスの「エルサレムへの旅」が始まりました。福音史家ルカはそれを、御父の救いの御旨への、御子の全面的な応答として描いています。

● ヨハネの洗礼に示されたことが、キリストの超越の秘義において成就しました。キリストは洗礼の泉を万人に開きました。実にこの秘跡は、私たちの救いのために死んで復活された御子イエズスにおいて私たちを愛される、御父の愛から生じたものです。

ここにいます子供たちが今日、原罪から解放され、新しい生命に生まれ変わるのはまさしく、キリストの死と復活の力です。キリストと一つになった彼らは神の養子となり、従って永遠の生命を継ぐ者、聖霊の神殿です。教会の一員となる彼らは、この世での教会の使命に参与するよう呼ばれています。

● ご両親、代父母の皆さん。今日、神と教会の前で皆さんは子供たちの将来に係わる大きな責任を引き受けられました。注意深く勇敢なキリストの教師となってください。主との出会いから生まれる人生の意味と希望を子供たちに伝えるなら、皆さんは彼らと共に真の人間性と「愛の文明」に満ちた未来を築くこととなります。

皆さんが子供たちの周りに、ルカの描くイエズスの洗礼と公生活の始まりを準備したような雰囲気を作りだす術を心得ておられることを願います。それは人生の意味・真理への愛・自分の弱さの自覚・他者との連帯を真剣に探し求めることにつながります。日々の家庭生活の中で体験するこれらの価値は、子供たちが主の御声を聞き、ついに主と出会うまで、喜んでつき従っていくことを可能にしましょう。

● システイナ礼拝堂での今日の典礼は、何と印象的なことでしょうか。このような機会にこの場所に集うのは、確かにそうそうあることではありません。目の前には最後の審判の場面が描かれています。ご一緒に、見てみましょう。そこにはキリストに選ばれ、つき従う人々の喜びがあるかと思えば、キリストを拒んだ人々の絶望があります。成功の人生と失敗の人生、神の恩寵に従順だったため、兄弟姉妹に神の愛を伝えるしるし・道具となった人々。主に従わず、永遠の呪いの道に向かう人々。

愛する兄弟姉妹の皆さん。最近の修復で荘厳さを増したこの場面が、キリストとその福音への忠実の道を熟考し、歩むための招きとなりますように。

ミケランジェロのフレスコ画では、イエズスの傍らには「信じた方」（ルカ 1・45）マリアがいます。信仰深い処女、憐れみの御母が、教師の任に当たる皆さんを励ます模範となってくださるでしょう。聖母が両親の皆さんと子供たちのために、イエズスに通じる道となりますように。これが、ここにいます全ての人と今日、そしてあらゆる時代に洗礼を受ける全ての人々のための私の願いです。アーメン！（九五・一・八）

罪に対する勝利は女性を通して（聖母マリアと教会 シリーズ 15）

1 「旧約聖書は、キリストのこの世への到来が徐々に準備されて行く救いの歴史を記述している。この古代の文書は、教会の中で読まれ、またその後の完全な啓示の光のもとに理解されるところによれば、贖い主の母である一人の婦人の姿を一步一步しだいにいっそう明らかにしてゆく。」（教会憲章 55 番）

第二バチカン公会議はこのように述べて、マリアの姿が救いの歴史の始まりから少しずつ示されていたことを思い起こさせます。マリアはすでに旧約聖書の中で姿を見せていましたが、それが始めて明らかになったのは「教会の中で読まれ」、新約の光のもとに理解されるようになった時でした。

聖霊は人間の著者たちを導いて、旧約の啓示を処女マリアの胎内を通してこの世に来られるはずのキリストに向けさせました。

2 救い主の母について預言した旧約の記述の中から、公会議は罪を犯したアダムとエバに神が救いの計画を明かされる箇所を特に選んで引用しています。主は悪の化身であるへびに向かって仰せになりました。「私は、おまえと女との間に、おまえのすえと女のすえとの間に、敵意を置く。女のすえはおまえの頭を踏み砕き、おまえのすえは女のすえのかかとをねらうであろう。」（創世 3・15）

十六世紀以来のキリスト教伝承によれば、こうした記述は原福音書と呼ばれ、人類の始まりからの神の救いのご意志を示してくれます。実に主は、まず罪を罰するのではなく救いの希望を与え、贖いのわざに積極的にあずからせ、主に背いた者にも深い寛大さをお示しになったことを聖書著者は伝えています。

さらに原福音書の記述は、女性独自の運命を明らか

にしています。女性は男性よりも先にへびの誘惑に屈しましたが、後に神のご計画によってその最初の協力者となりました。エバはへびの共犯者となって男を罪に誘いましたが、神はこの関係を逆転させて、女をへびの敵と宣言されたのです。

3 ヘブライ語の原文によれば、創世の書に記されたへびに対する行為が、直接に女に帰せられたのではなく、女の子孫に帰せられていることを現在の聖書学者たちは認めています。とは言え、誘惑者に立ち向かう女の役割は大変に強調されています。実際、へびを打ち負かすのは彼女の子孫なのです。

この女とは誰でしょう？聖書はその人の名を記していませんが、一人の新しい女性を垣間見せています。エバの過ちを償うため、神から望まれた人。事実、彼女は女性の役割と尊厳を回復し、人類の未来を変えるため、母としての使命を通じて悪魔に対する神の勝利に貢献するよう、召されたのです。

4 新約と教会の聖伝の光を得て、私たちは原福音の示す新しい女性がマリアであることを悟ります。さらにその「子孫」がマリアの子イエズスであり、過越の秘義において悪の力に対する勝利をおさめたことを認めます。

神がへびと女の中に置かれた敵意が、二つの意味でマリアにおいて実現したこともわかります。神の完全な協力者で、悪魔の敵であるマリアは、無原罪の御宿りにおいて完全に罪の支配から免れていました。マリアは聖霊の恩寵によって罪の汚れから守られていたのです。さらに、御子の救いのわざに協力することで、マリアは全面的に悪の霊との戦いに加わりました。

こうして、教会の信仰は「無原罪の御宿り」「贖い主の協力者」という称号をマリアに授け、聖母の霊的な美しさとすばらしい贖いのみわざへの密接な参与を賛え、へびと新しいエバとの間に置かれた永遠の敵意を示しています。

5 聖書学者と神学者は、新しいエバであるマリアの光が、創世の書から輝き出て救いの計画全体を照らしていると断言します。その本文の中に、マリアと教会の絆を見ることができます。ここで喜んで指摘したいのですが、創世の書で使われている「女」という一般名称は、女性をナザレトの処女と救いのわざにおけるその役割とに結び付けます。つまり、女性は悪の霊との戦いに加わるよう呼ばれているのです。

女性はエバのように悪魔の誘惑に負けることもありますが、マリアとの連携によって悪と戦う大きな力を授けられ、救いの道において神の最初の協力者となります。

神と女性との神秘的な提携は、今日も女性のたゆまぬ個人的な祈りと典礼的な信心、要理教育、愛徳の行為、修道生活への召命、家庭での宗教教育など様々な形で見ることができます。

これら全てのしるしは原福音書の預言をきわめて具体的に実現しています。実に、原福音書は教会内、あるいは目に見える教会の枠を越えて「女」という言葉の宇宙的な広がりを示唆し、マリアのユニークな召命が全人類、特に女性の召命から切り離すことのできないものであることを示しています。悪に対抗する神の最初の協力者と宣言されたマリアの使命によって、女性の使命に光が当てられたのです。(九六・一・二四)

教皇さまの動き

●12・5 教皇さまはアルバニア共和国の新任大使の訪問をお受けになった。「困難な状況にあるアルバニア難民の問題解決のため、カトリック教会の積極的な協力を約束したいと思います。全ての人に尊厳あるふさわしい生活条件を保証するのは、重要なことです。」「共産支配の後アルバニアに訪れた新たな危機は、カトリック教会が福音宣教と人間性の促進という重大な仕事に取り掛かることを可能にしました。この仕事を続け、発展させるために、新しい憲法と正当な法律を起草し、全ての政治的力の同意を得て、基本的人権と自由、なかならず信教の自由を法的に保証されることを希望します。」

● この日の朝、教皇さまは教皇庁立メキシコ・ローマ大学の教授と司祭である学生たちの訪問を受けられた。「遠く離れていても、皆さんの心からは任地の人々が消えることはないでしょう。キリストに倣った司牧

者の愛に導かれるまことの牧者は、信徒のことを忘れません。」教皇様は、紀元二千年の大聖年準備の二年目が、聖霊に捧げられて待降節から始まっていることに言及し、「司祭叙階の際に受けたキリストの霊は、牧者の模範であるキリストに私たちを倣わせ、その御名において振る舞い、親しくその心を生きることを可能にします。」「キリストに倣った清貧、貞潔、従順は司祭が他者のために完全に自らを捧げるための道です。聖なる教会への愛は、私たち司祭に委ねられた人々を聖化することによって、私たちもまた聖となることを可能にします。」

● その前日、聖座はカナダのオタワで対人地雷禁止国際協定に署名し、地雷犠牲者の援助のため、国際赤十字に10万ドルの寄付を約束した。教皇さまはすでに九七年の年頭、バチカン駐在の大使たちへのお話で述べておられた。「国際的な法機関を設置し、対人地雷の

除去に適用できる取り締まり機構を設けるべきです。全てのことはより安全な世界を築くために行なわれねばなりません。」

●12・6 朝、教皇さまはイタリア婦人センターの第24回総会出席者たちの訪問をお受けになった。総会のテーマは「紀元二千年に向けての女性とヨーロッパ文化」であった。「女性の感受性は信者の共同体を富ませ、キリスト教ヒューマニズムの建設にとって欠かせないものです。」教皇さまは、女性が主体となって関わるべき分野があることを強調された。「女性の人格的尊厳、労働者としての平等性を尊重し、女性が市民生活の中で果たすことのできる文化・政治への貢献を評価すること。福音を伝え、社会や教会の中で女性性の豊かさを促進すること。」「しかしまた、女性には、社会を苦しめている数々の社会問題を解決するというさらに広い活躍の場が与えられています。特に、生活の質に関わる全てのこと、環境への気遣い、人それぞれの必要に応じた社会サービスの提供、移民問題に関する法的措置を人間性あるものにするなど、女性の役割は重大です。他にも、余暇の活用、母性と家庭を守る、人間の尊厳が生産や経済の過程よりはるかに優ることの確認、若者の教育などがそうです。」

●12・7 朝、ローマ市内の教会でミサをあげられた。「勇気をもって、来たるべき主を告げ知らせましょう。皆さんを待ち受けるあらゆる困難や障害を越えて、全ての人に及ぶキリストの愛と真理を伝えましょう。」

● 同日、正午のお告げの祈りの前に、教皇さまは救い主の道を準備した預言者・洗礼者ヨハネを黙想された。「現代の私たちにも、改心と節制を呼びかけるヨハネの声は痛切に響きます。砂漠は一見、孤独や喪失感、恐怖を感じさせますが、それはまた、神との出会いにふさわしい場でもあります。」「これは個人、社会を問わずとても緊急の呼びかけです。どんな場所、どんな時でも、神は人間の所に来て、共に住もうと望んでおられます。救いのわざに加わるようにとお呼びです。」「本日の典礼は、不正を正し、善、憐れみ、理解、尊敬に欠けたところを満たし、自尊心や障壁、暴力を抑え、自由と尊厳ある生き方を妨げる全てのものを根こそぎにせよと告げています。このようにして始めて、真にご降誕を祝う準備ができるのです。」

●12・8 お告げの祈りにて。「本日、教会は聖母マリアの無原罪の御宿りの大祝日を祝います。キリスト信者が深く愛する記念日、降誕祭に向けて教会の歩みを

導く祝日です。」「処女マリアは希望して待ち続けるキリスト信者の模範です。」「マリアの心には利己主義の影もありません。自分のためには何も望まず、ただ神の栄光と人類の救いを望みました。無原罪の特権は、誇りを高めるためではなく、御子の贖いのわざへの全面的奉仕に役立たせるためのものでした。」「聖母は、運命論や無気力なあきらめ、あらゆる古い誘惑を退けることを教えます。神がやがておいでになることを教えます。私たちは皆、祈りと警戒を通じて神との出会いに備えなければなりません。」午後4時、教皇さまは車でスペイン広場に向かった。無原罪の御宿りのご像に表敬するためである。聖母に向かって、「激動の今世紀を三位一体の封印で締めくくりたいと思います。」「私たちの祈りを聞き、母として教会をお導きください…時が満ち、神なる御子イエズス・キリストが再び来られる日まで。」次に教皇さまはサンタ・マリア・マジョーレ聖堂を訪れ、「ローマ市民の守り」と呼ばれる聖母像の前で祈りを捧げられた。

● 同日、エルサレムの主教、司祭、修道者、信徒に宛てた教皇メッセージで、「思いは聖地・全教会の母エルサレムに向かいます。」

●12・10 一般謁見での教皇さまのカテケジスのテーマは「託身」だった。「神のみことばが人となったという事実は、時間の性質を大幅に変えました。キリストにおいて、人類の時は永遠で満たされたのです。」「神の御子は万人に神の生命を開きましたが、それはキリストと共に永遠を共有することでもあります。」「永遠が時間の中に入ってきた、すなわち、イエズスの地上での生涯において、御子と御父をつなぐ永遠の生命が入ってきたのです。私たちの間に来た永遠は、御父の秘義のうちに隠れている究極の終着点にたどり着くまで、全生涯を導くことを望む最高の愛の力です。人間生命に永遠が入り、人間生命は今や、キリストと共に永遠に向かう時の旅に招かれています。」「本当の危険は時が過ぎ去ることではなく、時をちゃんと活用しないことです。キリストが提供する永遠の生命を拒むことです。生命と永遠の幸福への望みは、いつも人間の心にわき起こるべきものです。」一般謁見の最後に、教皇さまは「今日は世界人権宣言の発布記念日（1948年12月10日）です」と注意された。「1998年はちょうど50年目になります。全ての人の人権が、人間の尊厳を守り、真の人類の進歩を視野に入れつつ尊重され、促進されることを心から願います。」

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙
 ■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円
 詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。



財団法人■精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448